

或る老いた教育心理学者の独り言

A Monologue by an aged Phenomenological Educational Psychologist.

吉田章宏
Akihiro YOSHIDA

目次

はじめに：読者に……………	65
『人間ひとりひとり』……………	65
『生きがいについて』……………	66
『真の授業者をめざして』……………	67
「彼らの言うことを聞くな、彼らの行っていることを見よ」……………	67
「総統は命令し、我らは従がう」(Fuehrer befiehl, wir folgen) で鍛えられる「強さ」：対比される「対決と交流」の〈教育と授業〉 を通して生まれる「毅さ」……………	70
「現象学とは何か？」……………	71
現象学は実在論であるか否か？……………	71
斎藤喜博の短歌世界に見る「言うこと」と「行うこと」……………	79
〈二刀流〉の勧め……………	80
「嘘」の人間の意味の現象学的解明を願う……………	81
終わりに……………	82



2020年11月
盛岡にて

Summary

This is a Monologue by an aged Japanese Educational Psychologist, now oriented toward Phenomenological Psychology. He views his own life course of these 86 years as a series of diverse transitions, one after another, between various lived worlds. The transitions include: from the pre-war to the post-war Japan, back and forth between the wealthy and the poor living, the extraordinarily many changes of schools and residences, from mathematics to psychology, studying in Japan and in the US for the total of 5 years, affiliating with many academic institutions in both Japan and the US, travelling all over the world, and so on. In short, He has enjoyed meeting so many various kinds of people in this world, to live to know the “*Different Existence*”. Even after he settled down in the field of Educational Psychology, his transitions have been destined to go on, starting from Mathematical Psychology, then to Dialectical Materialism Psychology of S.L.Rubinstein, to Cognitive Psychologies, and lastly, to Phenomenological Psychology. The last transition happened around 1975 when he encountered the excellent practices of the many Japanese teachers led by Mr. Kihaku SAITO, a master teacher, and also the phenomenological psychopathological writings by Mrs./Dr. Mieko KAMIYA. The details of the story are given in his articles: “My Life in Psychology” (2001) and “Living with Multiple Psychologies” (2010). This monologue explicates the various possible meanings of the lived transitions, for the purpose of discovering implications and insights for the betterment of his Personal Life, Educational Psychology, and Educational Practices. The guide posts in the article are: “*Raison de vivre*”, “*Toward a genuine practicing teacher*”, “Don’t listen to their Saying, but watch their Doing!” (Bergson/Jankelevitch), “*Fuehrer befiehl, wir forlgen*”. vs. ‘*Confrontation and Communication*’”, “*What is Phenomenology ?*”, “Is Phenomenology a Realism?”, “Doing and Saying seen from the Tanka-world of Kihaku SAITO”,

“A recommendation of adopting, metaphorically, the Fencing with a sword in each hand: e.g. Realism and Idealism”, “A request for a Phenomenology of Lying/Untruth/Falsehood”. This is just a Monologue of an aged, i.e. this author.

YOSHIDA, Akihiro (2001) My life in Psychology: Making a place for fiction in a world of science. *Journal of Phenomenological Psychology*, Vol. 32. No.2. 188-202.

Yoshida, A. (2010) Living with Multiple Psychologies, in Lester Embree, Michael Barber, Thomas J. Nenon (eds.) *Phenomenology 2010, Selected Essays from North America*. Zeta Books. 323-347

はじめに：読者に 今は、2020年の秋11月。そして、僕は86歳の「後期高齢者」、つまり「老人」あるいは「古い耄れ」の一人、である。幼いときに身体虚弱だった僕が、戦中戦後の日本を生き抜いて、よくここまで長生きしたものだ、と、我ながら驚く。それに、未だ、元気でさえあるのだから、なお驚く。僕の長生きを可能にしてきた事情のうち、僕が気づいた最も大事な事情は、「貧乏だった」時の体験からの学びだ。身に染みついたその学びに、さやかな「恩恵」として、感謝している。

今回の、本誌への執筆のお誘いに向けて、数か月前から書きたいことを書き出していた。ところが、予期に反して、えらく長くなってしまった。そのように長いままでは、読んでくださる読者は殆ど無い結果となるだろう。それに、二人の編者に、ご迷惑をお掛けすることにもなる、と気づいた。

原稿提出まで4日。そこで、長い原稿を一旦すべて破棄し、改めて、努めて短い原稿を書くことにした。「学ぶと教えるの現象学研究十九」への執筆だ。「独り言」として率直に正直に書く。読んでくださるかもしれない読者には、読んでよかったと、いつか思っただけのような、そういう文章を書き残したい、と思う。で、「独り言」として、「ですます調」でなく「であるだ調」で、一人称代名詞“I”は「僕」を用いて、書くことを選ぶ。また、長い文献表で読者を煩わせることを、極力避けることにする。海外の臨床関係誌に倣って、僕の肖像写真を冒頭に入れさせていただくことにする。顔は、その人間の生涯の表現である。ご了解いただきたい。

「人間ひとりひとり」 (Different Existence : van den Berg)

この世の人々は、パスカルもパンセに書いているように、実に多種多様だ。そのこと自体、実に面白い。この気づきは、僕の場合、これまでの多種多様の〈世界間移行〉の実体験から生まれた^(註 1)。

多種多様な人間を〈わかる〉には、多種多様な世界に生きる人間との「対決と交流」(斎藤喜博の言葉)で驚きを体験し、生きた人間として、可能な限り多種多様な経験を積み、物事に柔軟に対応できるように自らを鍛え、成長し成熟して行くことが必要だ。それは、これで十分と言うことは無く、限りの無い道である。この世では、予期できぬ新たな「驚くような出来事」に出遭う可能性が常に残されている。僕には、入院生活が幾度もある。しかし、幸いに、『夜と霧』のナチス強制収容所の世界(フランク、ヴィーゼル、プリーモ・レーヴィ、等の)も、「精神科病院」で患者として生きる世界(シュヴィング、ブランケンブルグ、神谷美恵子、荻野恒一、安永浩、等の)も、「監獄収監」され「死刑囚」や「無期囚」として生きる世界(加賀乙彦・小木貞彦、島秋人、中山義秀、等の)も、経験しなかった。また、「悟り」と自覚できる体験も未だ無いままである。しかし、『自明性の崩壊』(ブラッケンブルグ)を伴う深い「幻滅」や「絶望」の体験は経ている。そして、「許し」の体験(Steen Halling)^(註 2)もある。そのような出来事との出会いは、その時点では苦しく疎ましかったとしても、老いて静かに思うと、実は、僕の生涯にとって有難い修行体験の貴重な恵みとなっていたことを、理解できるようにもなった。ニーチェの「人生とは認識の手段である」(『悦ばしい知識』)という洞察の言葉に、僕も共感できる。そして、オルテガの幾つかの言葉「いずれの生も宇

宙に向かう一つの視点である。厳密に言えば、ある生の見るところのものを他の生は見ることができない。あらゆる個体——個人であれ民族であれ時代であれ——は、真理の理解のためのかけがえのない器官である、「神の視点はわれわれ各人の視点でもある。われわれの部分的真理は神にとってもまた真理なのだ」、「神が人間を通して事物を見るのである。あるいは人間は神の視覚器官である」(『現代の課題』)などは、「神」の存否の問題はさておき、「超越論的主体性」そして「絶対的学問」の思想に繋がって行くのだろう。僕の場合、例えば、心理学の世界の、暗い森の中で迷いに迷った時、未知の教育実践に出遭って衝撃を受けた時などに、これらの言葉は、僕を勇気づけてくれた。

都立日比谷高校、大学進学浪人、東京大学理科学類、駒場での進学浪人としての充実した一年、そして、教育学部・教育心理学科に進学することの決断、大学院進学、イリノイ大学博士課程と通過して、基本的に同方向を目指しているとも言える「学問と教育の世界」を生き抜いた。さて、「教育」について、それなりの理解と見解を自ら獲得できたのかな、と思ったことがあった。それは、数量化心理学から、一転、弁証法的唯物論心理学(S.L.Rubinstein)を経て、米国で新興の「認知心理学」(J.Piaget, J.S.Bruner, D.P.Ausubelなど)や「システム論」や「サイバネティクス」(W.Ross Ashby, Emery & Ackoff, D.M. Mackey, など)に親しむことに満足感を抱いていた35歳の頃、50年昔のことだった。それらは、冷戦下のソヴィエト心理学とも通底するところがあった。ある僥倖により、それまで自らが教育心理学の世界で親しんでいた「教授学習過程」としての教育の世界とは全く異質かとも思われた「教育実践の世界」、斎藤喜博の「対決と交流」としての〈教育と授業〉の世界、に遭遇する。「対決と交流」の「対決」という思想が、僕には新たな発見だった。覚醒を迫られ、震撼させられた、僕の人生で大きな意味をもつ出来事だった。

自らの抱いていた「教育」の理解の貧しさに気づかされ、人間の「生」と、人それぞれが生きる「生活世界」を中心に据え、「教育」の生きた現実、その詳細の捉え直しを迫られた。それは、自らの生き方の「変革」を求めるものでもあった。後から思えば、今日の競争社会における知識偏重の技術化され

た教育に視野を狭めた貧しい人間観に基づく、「教育の世界」の「森の出口」からの脱出を迫られた出来事だった、とわかることもできる。それまでの学びと自らの視野の狭さに気づき、その後の生き方を、考え直すことを迫られていたのだった。

「生きがいについて」(神谷美恵子)

幸運にも、偶然、神谷美恵子『生きがいについて』(みすず書房)に出会った。その世界に憧れた。『現象学的精神病理学』(荻野恒一)、『素足の心理療法』(霜山徳爾)などの世界への「入口」を発見した。心理学研究者としての自覚から、それまで避けていた未知の「現象学」の世界へ、ついで、「現象学的心理学」の世界へと、新たな歩みが始まった。既に40歳を超えていた。新たな世界への移行は止めよ、との先輩たちの好意ある忠告もあった。が、それまでの「世界間移行」の体験の積み重ねの自信が、新たな世界への移行を可能にした。具体的な教育実践に親しみ、新たな目覚めを通して、おぼろげながら、教育実践と現象学との親和性に気づくに到った。日本の教育研究の世界の狭く暗く陰鬱な諸情況、悪臭漂う雑踏と騒音を避けて、フルブライト委員会の「上級研究員」試験を受験、合格して、米国ピッツバーグ市デュケイン大学の心理学部教授Amedeo Girogiを頼り、1980年夏から81年夏までの一年間を、大学院生たちと共に学ぶ月日を過ごした。既に45歳に成っていた。Amedeoには、現象学に親しむために、現象学中心の哲学科大学院の授業の受講を勧められた。哲学では、John Sallis教授による*Phenomenology of Imagination* : John Scanlon教授による*Formal and Transcendental Logic* : Lester Embree教授による*Phenomenological Sociology of Alfred Schutz* : Madden教授のフッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』:などの講義を受講した。心理学では、Giorgi教授の「現象学的心理学の方法」と「メルロ＝ポンティの哲学」、Paul Richer準教授によるフッサール『イデーニI』をテキストとする「心理学研究の基礎」、Rolf von Eckerzberg教授による「社会心理学」講義、加えて、ヨーロッパを含む他大学の著名講師の講演も幾つも聴講できた。現象学という「森」の雰囲気味わった。若い大学院生たちと親しくピッツバーグの下町

に繰り出し、笑いに満ちた「対決と交流」の楽しいひと時も在った。「現象学漬け」の明るく充実した一年間であった。

『真の授業者をめざして』（武田常夫）

デュケイン大学の高層のタワーと呼ばれる寮の一室で、米国に持ってきていた蔵書の内から武田常夫（1929-1986）の全著作に集中して読みふけた。僕は、斎藤喜博・師（1911-1981）の著作よりも、武田さんの著作に親しみを覚えていた。それは、率直に語られる武田さんの「成長と変革」の世界が、僕が住む貧しい世界から、僕にとっては余りにも異質と見えた「斎藤喜博の世界」へと近づいて行く筋道を指し示して呉れている、と感じたからだ、今の僕は思う。少なくとも、それが、その時の、僕の正直な想いだった。不朽の名著『真の授業者をめざして』国土社の言葉「いかなる場合でも、解説的、ないしは啓蒙的な意図に根ざした文章だけは書かないようにみずからをいましめてきた。・・・、絶えず自分に執着し、自分を露呈し、それを通して自分を執拗に問いつけていく性質のものでありたいとねがってきた」。「・・・ふかく自分に問いつけてきたことからは、斎藤喜博氏から何をまなんだか、ということであった。それは、わたしが斎藤喜博氏との葛藤を媒介として、そこから氏とはまた別なわたし自身のことばや思想をどれほど生み得たかということでもある・・・」(196)。

「葛藤を媒介として」、「氏とはまた別なわたくし自身のことばや思想」、これらの言葉は、「本当にベルグソンを理解している者たちとは、ベルグソンの示した結論を繰り返す者たちではない。」(ジョルジュ・ギユスドルフ著(1972)『何のための教師：教育学の教育学のために』、小倉志祥・高橋勝訳、みすず書房、352-353)という言葉、僕に強く意識させた。

「彼らの言うことを聞くな、彼らの行っていることを見よ」

(ジャンケレヴィッチ／ベルグソン：合田正人訳)

1980年の渡米直前に、前橋で二人だけの宴の場に招き、僕を見送ってくれた武田さんとの再会を楽し

みに、夢と希望に満たされて帰国したのは、翌1981年の夏だった。僕の夢では、そこには、斎藤喜博・師亡き後の「教授学研究会」の明るく活発な活動が待っている筈だった。しかし、僕にとって意外なことに、研究者たちの間で、ひそひそ話の多い不透明感に包まれた暗い雰囲気の家が待っていた。明るい希望に満ちた実践と研究会の雰囲気は、何時の間にか、失われていた。僕は、異郷からの「帰郷者」(A.Schutz)として、直近の一年間に起こった日本での出来事に全く無知な邪魔者として、扱われている、と強く感じさせられた。生きた実践研究の場として約束されていた希望の現場との繋がりの再開も、堅かったはずの約束も、健忘症による忘却の故か、暗黙のうちに消えた。教育実践者達と子ども達に教育を説く研究者が嘘と裏切りを「行っていること」を、現実生活で身近に体験し、思いもかけぬ深刻な幻滅の悲哀を味わった。僕にとっては、米国での、将来への希望に満ち明るい笑いに満ちた雰囲気の世界とは、余りに対照的だった。明るい笑いに欠け委縮し鬱屈した研究者たちの、暗い表情と雰囲気、それは、仲間だったはずの互いに対する疑心暗鬼の世界として、僕の眼には映った。〈教育と授業〉の研究を共に語るに必須の「信」を失った。その頃、心から信頼できる武田常夫さんに温かく迎えられる、群馬の山間の宿での幾たびかの懇談が、僕にとっては心の救いだった。群馬県わたらせ渓谷鉄道の花輪駅近くの花輪中学校での教育実践の共同研究の計画も生まれた。「扇屋さん」とかいう旅館を定期的に訪問する際の宿泊に考えた。が、そうした計画も、不慮の交通事故の後遺症による武田さんの死によって、夢として総て潰え去って行った。

「彼らの言うことを聞くな、彼らが行っていることを見よ」(ジャンケレヴィッチ著(1996)『最初と最後のページ』合田正人訳、みすず書房、87)の言葉に初めて出会った時、ああ、僕を幻滅させたあの頃の出来事の本質は、ここにあったのだ、とこの言葉が強く心に響いたことを思い出す。「聖人と英雄がその隣人に働きかけるのは、文人のように自分たちが書いたことによってではないし、また、講演者のように自分たちが語ることによってでもない。自分たちが行ったこと、さらには自分たちがどのようにあるかによって、彼らは隣人に働きかける。」(87)。「バルザックが言っていることだが、雄弁な

説教師たちはわれわれの意見を変えはするが、われわれの行動を変えはしない。言い換えるなら、納得させることなく説得するのだが、それに対して、行動する人間、英雄と聖人と詩人だけが彼らに倣いたいという気持ちをわれわれに起こさせる。われわれが高潔を手にするのは、高潔を説き勧めることによってではないのだ! というのも、説教することで得られるのは体のよい同意だけだからある。」(88)

教育実践研究においては、「行っていること」と「言うこと」とが一致すべきだということを、僕は、暗黙の内に自明視していた。簡単な事だ、常識的に言って、「約束を守ること」、「嘘で人を騙さないこと」、「裏切らないこと」、それは、当然のことだと思っていた。が、そうしたことの保証は、いわゆる「研究者」の間では無かったのだ、と僕は気づいた。それは、信じ合える仲間としての思い込みが、僕には強かっただけに、その気づきから生まれた幻滅は、僕にとっては、深刻だった。そして、ふと、気づいたことがある。それは、教育研究者たちが、説教に使っていた言葉は、本質的に、指導者であった斎藤喜博・師の「示した結論を繰り返す」ことに留まっていた、ということだった。僕の幻滅は、むしろ、起こるべくして起こったことだったのだ、と理解することができるようになった。僕は、30年間の時を費やして、次第に、「言うこと」と「行っていること」との同一と差異に、特に敏感になって行った。そして、当時の研究者仲間たちの多くが、残念ながら、僕から見て、人として信じるには足りない人々であったことを、確信した。幾つもの事件があった。当時、斎藤喜博の名を「虎の威」として用いていたと見られる研究者の一人が、或る宴会場で、たまたま、30年ぶりに出会った僕を見掛けて、近づいて来たことがあった。そして、彼はこう言った。「斎藤喜博は、もう時代遅れだな」。僕は、咄嗟に返す言葉を知らず、敢えてその場で反論することもせず別れた。武田常夫において信じることのできた、実践者あるいは研究者としての、真正の「成長と変革」は、彼においては、そもそも最初から欠落してのだ、と僕は直感した。そして、その30年前、幾つもの裏切り行為に対して、怒りに身体が震え、熟慮して決断した絶交が、僕の人生にとって、その後の年月の虚しい浪費を避け、その後の充実した生活をもたらす好結果を生んだと、心底から納得し、確信

し、その運命に感謝することができた。その出来事の当の彼に限って言えば、或る時、気づいたことがある。彼は、もしかすると、彼が属する何らかの組織のために身を捧げていたのかもしれない、と。そして、もし、仮にそうだったとしたら、彼は、彼なりの信念でその組織のために努力し犠牲を払って、あるいは、彼の人生を、誠実に真剣に生きていたのかもしれない、と。しかし、今、そうしたことは、既に、僕の全く関知せざるところである。まさに、「人間ひとりひとり」である。ベルグソンの言葉の別訳に、「人々の言っていることを聞くな。していることに注目せよ」(中澤紀雄訳)がある。

或る時、「参加の哲学者」との世評のあったメルロポンティとサルトルに対する、彼らの「参加」と「行っていたこと」への批判の言葉 [ジャンケレヴィッチ著 (1986) 『道徳の逆説』 仲沢紀雄訳、みすず書房、241-245] が、目が留まった。その後さらに、加賀野井秀一、「ジャンケレヴィッチ・スキヤンダル:『ケチな小物』か『血迷った告発者』か」(月刊『ふらんす』、白水社、2008年3月号、44-47)を、友人の好意により入手し、その出来事の経緯を読んだ。さらに、機会があって [ヴィクトル・ファリアス著 (1990) 『ハイデガーとナチズム』 山本尤訳、名古屋大学出版会] によるハイデガーのナチス関与に対する、具体的な事実と証拠に基づく厳しい批判を読んだ。また、ハイデガー著 (1994/2017) 『形而上学入門:付・シュペーゲル対談』 川原栄峰訳、平凡社ライブラリーに付された、木田元著「解説:ハイデッガーという難問」(432-439)を読む機会に恵まれた。そこには、こう書かれていた。「だが、・・・、ハイデッガーがナチスに加担した思想家ということで切り捨てることのできるのなら、話は簡単である。ところが、そうはいかない。彼のナチス加担の事実は事実として認めながらも、それでもなお二十世紀の運命を考えようとすると、われわれはどうしても彼の思想と真剣に取り組み、対決せざるを得ないのだ」(439)。その「対決」という言葉が、僕の目を捉えた。その後、さらに、『黒い手帳』の話も聞き及ぶ。「言うこと」を聞くのか、「行っていること」を見るのか、「〈教育と授業〉の現象学」においても、おろそかにできる問題ではない。例えば、自らの授業実践について雄弁に語る実践者、教育実践について理路整然と語る研究者、さらには、

日々、黙々と授業実践に励む地味な実践者、・・・、それぞれの「言うこと」を「聞く」のか、「行っていること」に「注目する」のか。確かに、問題は複雑だ。いわゆる「教育実践研究者」は、多くの場合、大学教育の実践者でもある。「言うこと」と「行うこと」の一致の問題は無視できない。ふと、その昔、教育学の或る大教授が「言ったこと」と「行ったこと」を思い出した。その教授は、朝の第一時限の授業は、30分の遅れで9時丁度に開始することに決めたと「言った」。そして、学生たちの多くが遅刻する事実を、そうする理由として挙げた。さらに、その30分の遅れの開始に更に遅刻する学生が出たことを、授業開始をさらに10分遅らせることに決めた理由として、説明した。教授の「言うこと」と「行うこと」、確かに、一致はしていた。言行一致だ。だが、その一致の意味は何か？ 多種多様な意味を想像自由変容によって解明（＝暗黙の意味を明示化）することが可能だ。それが現象学の智慧だ。

僕はこう思う。例えば、ハイデガーの『形而上学入門』を読む。その時、もしかすると、読むこと自体が、ジャンケレヴィッチの引くベルグソンの忠告「彼らの言うことを聞くな、彼らが行っていることを見よ」に逆らっているように見えるかもしれない。ハイデガーが「行ったこと」に反発して「聞かない」とか「読まない」、という選択も在りうるかも知れない。しかし、そうではない、と僕は思う。僕は、ジャンケレヴィッチの言葉を、こう理解する。「彼らの言うことを聞くときには、同時に、彼らが行っていることを見よ。そして、自らを省み、考えを深め、さらに、考えつづけよ」と。それは、「言うこと」を鵜呑みにすることへの警告であって、「耳をふさいで聞くな」ということでは無い、また、「行っていること」を「見ること」を、心して大切にせよ、という忠告だ、と考える。第二次大戦中の戦時下の日本で、その時代と社会を生き、公立の国民学校（今日の小学校に相当）に学んだ総ての子ども達が、有無を言わず自動的に所属することになっていた、——所属させられていた、——大日本青少年団は、ヒットラー・ユーゲントに倣って結成された、と聞いている。その時代に生きたハイデガーが、その時代に「言ったこと」を「聞く」とき、彼が、その時代に「行っていること」を「見ること」も、可能であれば、決して「忘れない」、そ

して、自らも、生き生きとした豊かな想像力により、その時代と社会に赴いて、そこで「聞く」、「見る」、「省みる」、そして「考える」。そのうえ、それだけに留めず、それに重ねて、僕がいま生きている時代と社会に立ち戻って、「聞く」、「見る」、「省みる」、そして「考える」。その重ねあわせは、現象学で言う「想像自由変容」の一種でもありうるだろう。そうすることにより、僕の、自由で豊かな想像力により、二つの世界間移行の経験を「生きる」、そしてさらに「考える」。こうして、僕は、僕の生きる現在を、より一層充実させる。昔、彼によって「言われたこと」は、僕は、今「聞く」だけに留めず、その昔の、彼が生きていた世界に、時代と社会に、赴いて「聞く」こと、さらに、今の世界に戻って、また、もう一度「聞く」こと、それが大切なのだ。これは、思えば、ガダマーも『真理と方法』で説いていたことだった。人が、自らの生涯を豊かに生きると言うことは、そういうことだ。少なくとも、木田も言う通り、ハイデガーを「切り捨てる」ことはしない、それが、ハイデガーと「対決」しながら学ぶということだ、と僕は「考える」。「対決」が大事なのだ。例えば、心理学は、自らの歴史に学ばずに、時の流れとともに、「進歩」という幻想に酔って。少し前には流行っていた心理学を、「切り捨てる」ことを繰り返して来ている。ゲシュタルト心理学を「切り捨て」て「行動主義」に走り、次に「新行動主義」に走り、さらに、「認知心理学」に、・・・、浮遊する流行に流されて慌てふためきながら走り続けている。そして、累々と残される瓦礫の山だ。教育実践においても、基本的には、同様かもしれない。「斎藤喜博は、もう時代遅れだな」という言葉は、その象徴かも知れない。木田の「対決」という言葉は、斎藤喜博の教育実践における「対決と交流」という言葉を、ただちに僕に連想させる。そして、「対決」ということの、人間の生における重要性を改めて考えることを促される。「創造とは、たえずみずからを否定し、あたらしいものを生み出していこうとする苦悶のなかからしか求められないし、そして、それは、絶えずみずからを疑い、現状にとってかわる異質なものを探しもとめ、それとの対決をぬきにしてはありえないのだ」（武田常夫、『真の授業者をめざして』1971、77）。ここでも、「対決」の語が、僕の眼を射る。オルテガの言葉にも重なる。遠近法、

多視点性、想像自由変容、……。人間、時間、空間、世間、学際、国際、……。 「間」とか「際」などの付く「世界間移行」と、それぞれの世界における「対決と交流」の総てを、〈教育と授業〉を問う時、心に留めるべく努めよう、と僕は思う。

「総統は命令し、我らは従がう」(Fuehrer befiehl, wir folgen) で鍛えられる「強さ」: 対比される「対決と交流」の〈教育と授業〉を通して生まれる「毅さ」

武田常夫が斎藤喜博から学んだことの重要な中核には、和を重んじる穏やかで平和で素朴な「交流」の在り方を超える、激しい「対決」の実践とその意味の学びがあった、と僕は思う。真剣な闘いとしての「のるかそるか」の「対決」の在り方の、教育と授業における意味の発見があった、と僕は思う。そして、僕の人生においても、教育実践における「交流」に加えて、「対決」の重要な意味の気づきと発見、それに伴う「成長と変革」があったのだ。僕は、斎藤に学んだ武田を通して、そのことを、穏やかに、しかし、鮮明に学ぶことができた。それは、「総統は命令し、我らは従がう」(Fuehrer befiehl, wir folgen) としたヒトラー・ユーゲントの教育で育った子ども達の「強さ」とも、また、大日本青少年団の教育で育った子ども達の、厳しい規律、体罰と訓練を通しての「強さ」とも、その内容と質において異なる。実は、島小と境小の教育が目指したしなやかな「毅さ」の意味を覚ったのだと、考えたい。そして、「対決と交流」がめざす「毅さ」(毅然、剛毅、沈毅、などを思う)の獲得は、一人ひとりが生涯を通じて発見し続けることで、「成長と変革」として実現されるのだ、と僕は思う。

武田は、「教育の結果は、予想外の未知な困難に遭遇したとき、その真の姿が露呈される。」「教育とは、予定されたプログラムのなかで一見主体的らしくふるまう子どもをつくることにあるのではなく、思いもかけない未知な困難に遭遇して、それに確実に勝利する子どもたちをつくることなのである。」(同前書、147)。それを実現するためには、教師が、自らにおいて、そのような「真の姿」を実現することが、求められるであろう。カナダの

Max van Manenは*Pedagogical Tact* (2015) の副題を“*Knowing What to Do When You Don't Know What to Do*”としている。つまり、教師にも、「予想外の未知な困難に遭遇したとき」の自らの在り方を省みることを促し、武田の言う「毅さ」を求めることを促す書としている。子どもと教師に加え、研究者を含む、教育に関わる人々すべてを、視野に入れなければならない。同著、*Phenomenology of Practice* (2014) のような著作が、日本の教育実践・研究の世界から生まれるのは、何時の日であろうか。蘆田恵之助の「共に育ちましょう」の教育遺訓も思い浮かぶ。こう考えて来ると、「斎藤喜博は、もう時代遅れだな」どころの話ではない、と僕は思う。今こそ、必要とあれば、時代の流れに取って逆らっても、「対決と交流」の教育の本質をとらえ、その実践に深く学ぶべき時なのだ、と僕は思う。

「想定外でした」という言い訳が、あたかも、許容されるべき正当な言い訳として、日本で聞かれるようになってから、久しい。あらゆる出来事を、既知の「想定内」の出来事として捉えて、その出来事の「式次第」にも似た「マニュアル」に従がって、想定された通りに対処することで、「事足れり」と済ませる教育、それは、「住み慣れた日常生活世界」の「安定した地平」に安住している教育だ、とも言える。そうした教育で、日本が、そして世界が、これから直面する「未知の困難に確実に勝利する」ことは、到底不可能だと思う。斎藤喜博・武田常夫らの「対決と交流」の教育実践が目指した「毅さ」の意味の重要性を、教育実践者と教育研究者それぞれが、自ら気づき、そして、自ら発見し、互いに「対決し交流する」ことを通して、自らの「毅さ」とし、自らを成長させ変革して行くことが求められている、そう僕は考えるようになった。果たして、その実現が、時間的に間に合うか否か。世界的に、極めて危うく難しい時代に突入しつつあるのに、と思われてならない。

日本で、「教師が本を読まなくなった」、と聞くようになってから既に久しいらしい。そのことの背景には、さまざまな事情があるに違いない、と僕も思う。林竹二は、既に、1986年に、「教師の第一の任務は、教えることではなくて、絶えず学ぶことなんだ」とも、「自分で変わろうとしないで、子どもにだけ変わることを求める——これが教師の原罪

だ」という言葉を遺していた（本誌、十八、106）。この林の言葉と思想は極めて重要だ、と僕は思う。しかし、林の言葉も思想も、既に時代遅れとなってしまうのかも知れない。「時代遅れ」となる流行の目まぐるしい変化は、心理学においても激しい。しかし、教育実践においても、ご紹介した挿話の「彼」の言葉通りに、今日、流行の変化が起こっているのだろうか。確かに、大日本帝国の教育と、戦後の、日本国の教育との間では、そのような変化が起こった。年老いてしまった僕の全く知らない日本の教育現場の実践において、大変動が起こっているのだろうか。では、果たして、希望に満ちた力強い新たな芽が育ちつつあり、だから「対決と交流」の教育など「時代遅れだ」と言えるのだろうか。「彼」の「言うこと」を聞いた時以来、「彼」が「行っていること」を「見ること」が必要とは、もはや思はなかった。ただ、考えた。

「現象学とは何か？」

”What is Phenomenology?”

この問いに対する答えは多種多様だ。そして、その答えの多種多様性の事実そのものが、現象学の説く「認識の多視点性」の強調の事実と整合的である。その二つの事実は相互に確証しあっている。だから、「現象学とは何か？」という問いは、話が纏れていて複雑だ。親しい友人のDavid Seamon教授の電子雑誌：*Environmental & Architectural Phenomenology*. 2019, Vol.30. No.2. pp 44-46. に掲載された論稿Whither Phenomenology? に、補遺のようにして、Twenty=three definitions of phenomenologyが掲載されている。その邦訳は、英語原文と並べて、僕のコメントと一緒に、以下に記す僕のホームページにも掲載しておいた。興味あれば、どうぞご覧あれ。

<https://yoshidaakihiro.jimdofree.com/>

さて、仮に、「現象学とはなにか？」の定義を、と人間科学の研究者たちに求めたとすれば、これだけ多種多様な「定義」が得られる可能性が確かめられた。その多種多様性が、ここに、目に見える形で、事実として与えられたことになる。では、この多種多様性の由来はどこにあるか、また、その意味は何か、そして、僕は、どの様にして、どの定義

を自らの定義として受け入れられるものとして選び取るか、そのことも問題となる。しかし、そのことを、ここで論じようとは思わない。この多様性を現象学理解の混乱とか混沌として、慌てて、何らかの統一を急ぐべきだ、とも僕は思わない。フッサール自身、時の流れとともに、前期、中期、後期と、現象学の理念を変化させ、深化させて行ったのではなかったか。現象学を学び、覚り、そして、自らの悟りに到るべき凡人に、現象学の構想と理念を、いちどきに単一の定義で捉え切ることなど、出来よう筈もない。フッサールと同様に、その学びの創造と発見の経過において、現象学の理解は変化し、自らも成長し、自らを変革して行くのだ。僕の前掲コメントにも、和文と英文で、そう述べて置いた。また、ブリタニカ草稿「現象学」の共同執筆の不成立という事件に見られたフッサールとハイデガーの見解の不一致の挿話は、凡人にとっても示唆的だ。R.インガルデンの、フッサールの「超越論的現象学」に対する異議も想起される。現象学の巨人たち相互間の多様な「定義」の現実的可能性は、かえって現象学の生成の自由な開放性と豊饒さを意味するのだ、と僕は思うようになった。そして、ふと、その対照的な在り方として、「総統は命令し、我らは従がう」（Fuehrer befiehl, wir folgen）の在り方を想起する。ここでは、恐れながら、僕は、フッサールを現象学の「導く人」（Fuehrer）と見なしている。多くの人もそうであろう。だが、フッサールを導くのは、現象学の精神「事態そのものへ！」である。それを実現するのは、その精神に共鳴した人々の「対決と交流」だ。その心は、「自ら反りみて縮（なお）くんば、千万人といえども吾往かむ」（孟子）であり、「過ちを改むるに、憚ること勿れ」だ。そう、僕は思う。

現象学は実在論であるか否か？

僕にとっては、ずっと気になっていることがある。それは、現象学が実在論であるか否かという問題だ。もっと平たく言えば、現象学を学ぶことによって、事柄、あるいは、物事を、「事柄そのものへ！」の精神で、より一層明らかにすることができるか、という問題でもある。

僕は、生まれつきの「素朴実在論者」である。し

かし、それは、素朴だった僕が大学で哲学を齧り始めて、弁証法的唯物論を学んだ頃、初めて知ったことだ。それも、そのことが、僕の中で問題となり始めたのは、当時のソビエト連邦モスクワ大学の心理学者・S. L. ルビンシュテインの著作を学びだしてからのことだった。その時、考えることを促されたのは、今の僕の言葉で言えば、素朴实在論の世界から弁証法的唯物論の世界への移行の問題だった。僕は、職業的な哲学者ではない。率直に言えば、哲学のことは哲学者に任せていた僕にとって、実はどうでもよかった。ただ、生まれたばかりの教育心理学の世界に在って、実験室の実験動物ではない現実生活の教育活動を生きつつある人間の心理を、どの様を知るか、知ることができるか、が問題だった。如何にすれば生きた人間心理の意味深い認識を成し遂げることができるか、ということが、僕にとって問題だったのだ。それも、实在論の立場で、という大前提を、僕は、暗黙の内に置いていた。それは、当時の僕が知る限りの観念論者たちの、「世界の存否」などという「馬鹿げた議論」に付き合っ、僕の人生での貴重な時間を、これ以上無駄なことに費やしたくはない、という正直な想いが、僕の心の中に、強くあったからだ。若い時に聞いた、波多野完治・師の「観念論者は、老いて、唯物論に戻って来る人と、観念論に行ったままになる人とが居ようだね」という言葉が印象に残った。しかしまた、唯物論を本当によく分かるためには、観念論も深く学ばなければならない、との言葉も、ハッキリと覚えている。そして、革命前の若い頃、ドイツで学んだルビンシュテインは、西欧の観念論哲学もよく学び、それを克服したうえで、弁証法的唯物論を信奉している人だ、と僕は思っていた。ルビンシュテインは、いわば、僕に貴重な人生の時間を贈ってくださった恩人だと思っていた。さて、ルビンシュテイン著『存在と意識』上巻に、つぎのような文章がある。

「科学的認識は实在を構成するという、外国の認識論においてきわめて普及している考えの基礎には、認識は主観の活動であるという、正しい考えが含まれている。しかし、この正しい命題は、主観の認識活動と客観的实在との誤った対置によってゆがめられている。それらを二元論的に対立させることによってまさに、主観の活動の結果は、存在の構成

であると誤って考えられている。それにもかかわらず、実際には、この結果は、多かれ少なかれ十分な、多かれ少なかれ深い、存在の反映である。科学的認識は实在の構成である、とする理論の支持者たちは、この構想を擁護するにあたって、存在の認識は主観の活動である、という最初の正しい命題に自己の論証を集中する。補足的な前提——さきに指摘した、主観の認識活動の結果と客観的存在との二元論的対置——は、暗闇に残されたままである。それにもかかわらず、まさにそのなかに、正しくない全体としての構想の基礎がある。第一の前提は第二のものなしには構想の全体を正当化しない。したがって、この構想の全体を批判するにあたっては、二つの前提を区別し、第一の前提との見解の一致を表明し、第二の前提が成り立たないことを証明し、このようにして、結論としての命題もまた成り立たないことを明らかにしなければならないのである。」[ルビンシュテイン著(1960)『存在と意識』上、(寺沢恒信訳)青木書店(138-139)]

この文章は、小さな註として収められているのだが、実は、若い頃に初めて読んだ時から、気になっていて、何時か、霧のように感じる不透明な想いを晴らす助けを、広い世界の賢人に求めたい、と常々思っ、て来たことなのだ。ことに、「多かれ少なかれ十分な、多かれ少なかれ深い、存在の反映である」という「相対的真理から絶対的真理」へという弁証法的唯物論の「反映」の考え方と、現象学の「事態そのものへ！」の理想、「現象学的認識論」における「真理の認識」(隠蔽性/非-隠蔽性の原闘争、ハイデガー)の構想との間の、同一と差異の相互関係が、僕にとっては、恥ずかしながら、未だに不透明で、気がかりとして残り続けているのだ。それは、例えば、(1)「優れた教師」の子ども理解が、「如何なる意味で優れているのか」という問題を明らかにしようとする時、さらには、(2)そもそも、仮に、「子ども理解」において「優れた」と「平凡な」と「劣った」との間に差異がもし在るとすれば、その差異は、誰が、どの様にして、如何なる根拠をもって知ることが出来るのか、とか、(3)それぞれの「子ども理解」の「正しさ」は、どの様にして、誰が確信をもって知ることが出来るのか、とか、また、その場合の「正しさ」とは如何なることなのか、そして、そのことは、どのように根拠づけることが出

来るのか、とか、また、(4)「優れた」とか「劣った」ということは、そもそも、誰にとって、どのような根拠をもって、どの様に理解し区別することが可能なのか、などなど、疑問が次々に湧いて来るからだ。もちろん、一方で、教育実践の場では、具体的な事例に即して、例えば、長年の経験を積んだ達人教師（例えば、蘆田恵之助や斎藤喜博など）が教え、経験の未熟な新米教師（例えば、若き日の、大村はま、武田常夫など）が直接に学ぶ、という形で、「優れた」実践事例を介して、そうした智慧が、次々に伝えられて行くという伝承の伝統が現実に行っている、僕は思う。そして、そのような伝承の伝統は、信じるに足る、と僕には思われてならないのだ。例えば、西平直著（2009）『世阿弥の稽古哲学』東京大学出版会、ウタ・ハーゲンや、ステラ・アドラーそれぞれの「演技レッスン」の極意書を思う。また、宮本武蔵『五輪書』や柳生宗矩『兵法家伝書』なども思う。達人は、そうした書籍を通して、その生涯の修行を賭けて追究し獲得したその道の智慧の、後進への伝承を試みているのだ、と僕は信じる。彼らは、「これは夢か幻か」とか「夢か現か」という問いを中心には据えない。おそらく、例えば、生死を賭けた戦いにおける現実、今の言葉で言えば、「素朴実在論者」として生きられていただろう、と思う。「周の夢に胡蝶為るか、胡蝶の夢に周成るか」という「胡蝶の夢」（荘子）の問いは、そこでは、力を持たない。現象学者が、そのような問いを真剣に問うことを、僕は、特に批判も反対もするつもりはない。むしろ、驚き、そして、素晴らしいと思う。フッサールの「天動説」と「地動説」の現象学的吟味も素晴らしい、と思う。ただ、僕は、一人の常識人として、夢と現実を、はっきりと区別し、〈教育と授業〉の理解を深めるために、現象学の洞察を生き生きと活かしたい、と願って来たのだ。それは、僕にとって、夢の中のことではない。

僕としては、自ら納得できる洞察の一つがここにある。それは、例えば、行動心理学者が現象学的心理学者を〈わかる〉ことが出来なくても、それが不思議だとは、僕は思わない。また、弁証法的唯物論者が現象学者を〈わかる〉ことが出来なくても、それも、特に不思議だとは思わない。しかし、仮に、現象学者が、弁証法的唯物論者を〈わかる〉ことが出来なかったとしたら、それは、その現象学者の〈現

象学〉はまだ未熟なもので、ご本人がその自らの未熟さに気づかなかつたら、その未熟さと怠惰は、おおいに恥ずべきことだ、と僕は感じることだろう、ということである。なぜなら、(1) 日常社会においては、普通の人々の大多数は「素朴実在論者」であろうということ、そして、(2) 人々の生きる世界を〈わかる〉ことを目指す現象学者として、如何なる弁証法的唯物論者であれ、「人々」の一員であることを、忘れてはならないであろう、とも考えるからだ。(1) と (2) を併せるならば、「〈素朴実在論者の世界〉の現象学」も、「〈弁証法的唯物論者の世界〉の現象学」も、現象学が全体として成熟して行くためには、「〈現象学者〉と〈現象学学者〉それぞれの世界の現象学」と共に、「現象学の現象学」として、是非、深められなければならない研究分野ではないだろうか、と僕は思う。寡聞にして、そのような研究が、現象学研究の最先端あるいは最深部では、深化し展開しているのかも知らない。せめて、その様子でも知りたい、と思う。

その意味でも、R.Ingardenの大著*Der Streit um die Existenz der Welt, vols.4* は、是非、誰か日本で、ドイツ語に堪能で、現象学に深い理解をもつ哲学研究者に、平易に解き明かして欲しいものだ、と僕は心から願っている。彼Ingardenは、文学作品を含む芸術作品とその認識の現象学を研究した〈現象〉学者であると同時に、現象学と唯物論の両方に精通している〈現象学〉学者でもある。彼の洞察は、傾聴するに値する、と僕は信じている。が、僕に残されている時間は僅かだ。

さて、生来の素朴実在論者の僕は、目立たない小著だけれど、Henry Pietersma (2000) *Phenomenological Epistemology*, Oxford UPを2011年に読んだ。この小著の議論は、僕は納得できるように、感じた。あるいは、著者の言う実在論 (Realism) と現象学の相互関連を明らかにして欲しいと願っている。著者が弁護しようとしているのは、「真理」に関して、「真理の本質は、真理の探究から区別されるべきである」["the view that the nature of truth should be distinguished from the search for it." p.ix, 前掲書] という見解だ、と書いている。このPietersmaの見解は、かつて僕が心酔したS. L. Rubinsteinの『存在と意識』上にあった前掲の文章と、僕の中では通底する、と感じる。

さて、もちろん、僕は哲学者研究者ではない。弁証法的唯物論と現象学の間を架橋しようなどという大問題に取り組むことは、その問題に僕がどれ程関心があろうと、僕の為すべき仕事ではないと、悟っている。しかし、27歳ごろから40歳頃まで、波多野完治・師の導きで、ルビンシュテインの弁証法的唯物論の世界に浸り、ソビエト心理学に親しみ、その世界では激しく批判されていた「現象学」には見向きもせずいたのに、自然科学的傾向の強い認知心理学を自らの専門として、蘆田恵之助・斎藤喜博・武田常夫・林竹二、多くの教育実践者の実践の現実と著作に親しみ、魅せられて、翻って、自らの親しんで来ていた認知心理学の、教育実践と格闘するときの非力を痛感した。或る偶然から、神谷美恵子の『生きがいについて』と、荻野恒一の『現象学的精神病理学』の仕事と著作に目を開かれて、現象学の世界への「入口」を見出した。まあ、短く言えば、それが僕の後半生だ。では、かつての弁証法的唯物論の世界と、現象学の世界と、その両方に住んだ経験がある僕自身にとって、二つの世界は、一体どう繋がっているのだ、と「あの世」に行く前に、もし間に合うなら、自分の人生を省みて納得する意味でも、考えてみたい、と思うのは、決して傲慢ではないだろう。いや、たとえ傲慢だと他人に嘲られたとしても、僕にとっては、そんなことは、どうでもよいことになってしまっている。納得を得たいと思うこと自体は、少なくとも、現象学の「事態そのものへ！」の精神からして、躊躇したり、抑圧したりすることは、僕にはもう出来ない、と思う。

ルビンシュテインの『存在と意識』の第一章「物質世界の諸現象の普遍的な相互関連の中での心理的なものの位置について」の冒頭にある、当時印象深かった文章を読み返してみる。「人間の知ることを求める探究的な思考は、ますます増大しつつある情熱をもってしかも成功裡に宇宙の深みへと浸透し、物質的世界を——大きい方にも小さい方にも——限りなく認識し、原子と宇宙の構造を理解し、自然が一步ごとに人間の前に提起する諸問題をつぎつぎに解決している。人間の知ることを求める探究的なこの思考は、自分自身にも立ちむかい、思考と自然、精神的なものとの物質的なものとの相互関係に関する問題に注意を集中せずにはいられない。この問題の解決がことなることによって、観念論と唯物論

——哲学においてたたかいつつある主要な方向——が区別される。・・(中略)・・。心理的なものと物質的なものとの関連についての、心理的なものが物質的諸条件に依存していることについての問題は、心理的過程の認識可能性についての問題であるばかりでなく、その制御可能性についての問題でもある。・・(中略)・・、[これらの問題の]解決の如何によって、人びとの心理を形成し、一定の方向づけをもって変化させ、教育する方法が規定される。」(13-14)。

このあたりは、認知心理学者にも、受け入れ可能な考え方ではないだろうか？

「心理現象は、その他の任意の現象と同様に、生活のすべての現象と、物質的世界のすべての側面や性質と関連している。ことなった関連においては、それらはことなった質をもつものとして現れる。・・(中略)・・。心理的なものの本性を全面的にかつ真にあばきだすためには、そもそもはじめからこれを、なにかある一つの関係において現れる質に(例えば、物質的なものにたいする観念的なものとして、あるいは、客観的なものにたいする主観的なものとして)一面的に固定することによって、心理的なものの抽象的=普遍的な概念から出発してはならないのであり、心理現象の具体的研究に立ちむかい、それらをあらゆる本質的な関連と媒介のなかでとらえ、それらの種々の性格づけを解明し、これらの性格づけを、そのおのおのが現れる連関と関係の客観的論理に対応させて、相互に関係づけなければならない。」(14)

〈客観/主観〉だけでなく〈内在/超越〉も、と言った時、ここで「心理現象」と名づけられている「心理活動」の主、一人の人間が視野に入って来る。そして、すべての物事を、その主人公の視点から見直してみる。すると、〈内在/超越〉という性格づけで、その主人公が確実に、正確に捉えることのできるのは、〈内在〉と性格づけられる心理現象の世界に限られる、〈超越〉は、その主人公にとっては、確かめることが不可能な事物現象の世界だからだ、というのが、現象学の考え方だと、畏友・竹田青嗣さんは、書いておられるのだ、と僕には読んだ。そして、ここで、ルビンシュテインの考え方と、竹田さんが紹介してくださっているフッサールの考え方の中には、不協和音が響き始めるようにも、僕には

思えてくる。实在論と観念論の対立だ。だが、僕は、異同を言うだけでは、満足できないし、満足したくもない。

さらに、以下も引用して、想起と確認に努める。「心理現象は、脳の機能または活動としてのみ生まれ、かつ存在する」。「心理現象は、脳の活動であり、これとともに、世界の反映、認識である」(15)。「心理活動の源泉たるものは、脳に作用を及ぼすところの世界である。」(17)「反映論の本質は、簡単にかつさしあたり荒っぽく近似的にこう表現することができる。すなわち、感覚と知覚がではなく、物質的世界の事物と現象が感覚され知覚されるのである、と。感覚と知覚とによって事物そのものが認識される。しかし、感覚と知覚とは、事物そのものではなくて、それらの像にすぎない。」(20)「心理活動の主観主義的理解を克服するための出発点は、心理現象は外的影響からはじまるところの個人と外界との相互作用の過程で生まれるということ、このようにして、外界は心理現象の決定にはじめから参与しているということに認めることにある。」(21)

「世界におけるあらゆる現象は相互に関連している。あらゆる作用は相互作用であり、一つの現象のあらゆる変化はすべてのその他の現象に反映されている。そして、この変化自身が、この現象に影響を及ぼしている他の諸現象の変化への応答である。あらゆる外的作用は、この作用を受ける物体、現象の内的性質を通して屈折される。あらゆる相互作用は、この意味で、ある現象の他の諸現象による反映である。」(22)

僕にとっては、とても懐かしい文章を、こうして、数十年ぶりに読み直したことになる。そして、自然科学的な思考に慣れ親しんでいた、また数学専攻を夢見ていた、理科生で、「素朴实在論」者であった僕には、とても納得が行くと感じられた考え方であったことを、思い出す。

僕の尊敬する畏友・竹田青嗣さんは、その『現象学入門』（NHKブックス）で、フッサールの「現象学の根本問題」を、以下のように、明快に整理し紹介してくださっている。

「現象学の根本問題は、人間の認識の確実性を明らかにする点にあるのではない。また、いかにすれば正当な認識に達するのかを考えるのでもない。さ

らにまた、人間の認識についての学（科学）ではない。これらはいつのか一般化されている現象学理解だが、すべて俗流現象学なのである。／現象学の課題はむしろ、まず〈主観／客観〉の「一致」をめざす伝統的認識論は成立しないこと、さらに、論理的には成立し得ないはずの人間の共通認識がじっさいにはそれなりに成立していること、またしかし、伝統的認識論の不可能性から認識一般を全否定する必要はなく、そこにある正統性があること、つまり認識の意味を明らかにする点にある」(72-73)。「フッサールは、〈主観／客観〉の難問」、つまり、「〈主観〉は自分の外に出て自分の認識能力の正しさを確かめられないから、〈主観〉と〈客観〉の『一致』は確認できない。」この問題は、「原理上〈客観〉から〈主観〉を説明するのではなく、〈主観〉から〈客観〉を説明する以外にない」。そこで、フッサールは、つぎのようにこれを解いた。「問題の核心は、『一致』の確証はありえないのに、なぜ人間は客観の存在を疑えないものとして受けとっているのかということに答える点にある。このとき可能な答え方はただひとつだけだ。人間は自分の内に、自分の『外側に』あるものを確信せざるをえない条件を持っている。この条件が『原的な直観』なるものだ。これらはいずれも自己の自由にはならない対象として人間に現われ、まさしくそのことで、人間に『外部』にあるものの存在、存在を確信させるのである、と」(73)。

現象学は、「人間の認識の確実性を明らかにする」のでも、「いかにすれば正当な認識に達するのかを考える」のでも、「人間の認識についての学（科学）」のでも、ない。それらは、〈主観／客観〉図式に囚われているために、〈主観／客観〉の「一致」をめざす解決不可能な課題に縛られて抜け出せてないでいる。そこで、〈現象学的還元〉により、(1)「自然的世界像」につきまとう「一切の素朴な確信〔自明性〕を留保する。(2)「自然的世界像」を基盤とした科学的「学問」の成果、知見の一切を留保する。(3)いろいろな〈物語〉(神話、宗教的世界像、文学作品等)の知見をも留保する。〈還元〉とは、厳密な学問的方法ではない。ただ、「客観がまず存在する」という前提をやめて、方法論的懐疑として独我論的に考えをすすめる、という“発想の転換”、視線の変更を意味するに過ぎない、という。では、そ

のような発想の転換はなぜ必要なのか。それは、現象学は、確信一般の「不可疑性」の根を求めることをめざすからだ、という。そして、「内在的知覚には疑わしさがなく、超越的知覚には疑わしきがあること」を確信し、必ず「可疑性」が残ることになる〈主観／客観〉の「一致」という認識の確証の不可能性を、「不可疑性」と「可疑性」を分かち〈内在／超越〉原理を選び、内在から出発して、超越に到る道を選ぶ、ということなのだ、という。この原理は、「〈知覚〉経験をよく内省し直したすえに、そこに原理上いつでも限りなく疑うような側面とそれについて疑うことができないような側面のあることを指摘しているのであって、認識を、構成された全体とその構成要素に分けているのではけっしてない」(95)。つぎに、大事な指摘がある。

「現象学の課題は、・・・、対象を普遍化しようとする学の努力は、むしろ人間の実践的な生の実践的な生の意味、そこから導き出される世界の存在の意味に向けられるべきである。なぜなら、意味というものは、それ自体実在するものではないが、どんな人間の生にとっても生そのものを構成する本質であり、しかもひとつのはっきりした普遍の構造を持つからである・・・。」(151)そこで、現象学は、「世界やさまざまな事物はなぜ人間にとってそのように存在しているのか」と問う。さらに、「人間にとって生の意味はどのようにあるのか、それはどういう根拠から現れどういう場面へむかっているものなのか」ということを「普遍的に」問う。ここで、「彼の“意味”への問いは、究極への問いではなくむしろ意味の初源性への問いなのである」(152)。「意味の初源性」という言葉が注目される。ついで、フッサールの『危機』書の第二章からの言葉が、引用される「単なる事実学は、単なる事実人しかつづらない。・・・人間にとっての焦眉の問題と・・・は、この人間の生存全体に意味があるのか、それともないのかという問いである。」(152)。

名著『現象学入門』をくりかえし読み、竹田さんが確信をもって理解した現象学の全体像とその本質は、明快に提示されていると思ひ、感心し、感動する。

しかし、僕が、現象学的精神病理学の諸業績に導かれて、現象学に近づいたとき、僕がそこに求めていたのは、何であったかを、もう一度、思い起こし省みしてみる。すると、少なくとも、竹田さんが指摘

する「確信成立の条件」の解明だけではなかったのではないかと僕は思う。恐らく、僕は、素朴实在論者として、あるいは、弁証法的唯物論に学んだ人間として、また、教育心理学という、教育の心理の事実を研究する事実学としての「科学」を学び、その延長上に「現象学的心理学」を望み見ていた人間として、さらに、「現象学の森」への入り口を「現象学的精神病理学」に見つけて迷い込んで行った者として、現象学をどう捉えていたか。例えば、「想像力の現象学」として、自明性に「驚き」を発見する学として、また、人間経験を、開かれた仕方、従って、詳細に豊かにとらえる学として、・・・、捉えていたように思う。端的に言って、僕は、現象学に「主観／客観」の一致と「的中」への道を求めていたのだと、今にして思う。素朴实在論の根深さよ、と我がことながら、感嘆する。

「主観／客観」の「一致」としての「的中」の確証の可能性を否定し、「確信の成立条件」の解明を目指す研究が、哲学研究として存在し、そのような追究がなされることに、僕は、異議を挟む積りはさらさら無い。だが、「主観／客観」における「的中」としての「真理」、主観と客観の「一致」としての「的中」の確証の不可能性を証明し、「確信成立の条件」の解明に向かうという発想の転換が、哲学としての現象学研究の卓越した在り方である、としても、あるいは、そのことを理論的に証明することが現象学の真髄である、という理解が真の現象学理解である、としても、僕はまだ十分の納得と確信が得られていないことに気付いて、我がことながら困っている。ぼんやりと、四つの理由に気づく。(1)その「確信の成立条件」の解明だとする現象学理解が仮に「正しい」と「言う」とき、その「正しさ」は、「確信の成立」としての、「正しい」とする「確信が成立した」と「言うこと」に留めているのであろうか。あるいは、そうではなくて、「始祖フッサールの——イデーで展開されている——現象学の理解」に「合致する」、いわば、「フッサールによる理解」と一致する「同じ理解」に到達し、その理解を共有したという意味での「正しさ」の主張なのであろうか。「的中」や「一致」の契機が、そこに、持ち込まれていることに、なりはしないか。(2)「確信の成立条件」の解明であるとする理解以外の他の理解、ことに「主観／客観」図式から脱け出せてい

ないでいる、とされている現象学理解が「俗流現象学」であるとする性格づけを「言う」ばあい、それは、「そのように確信している」ということを「言っている」のか、あるいは、ここでは、「主観／客観」図式によって、「確信の成立条件」であるとする理解は「的中しているが」、他の理解は、「的中していない」ので「俗流現象学」である、としているのだろうか。その場合、「一致」や「的中」が、知らぬ間に、潜り込んでいるのではないか？ ここでは、「言うこと」と「行っていること」との間に齟齬が起こっているように、僕には見えてしまい、困っているのだ。(3) 恐らく、結局は、僕は、基本的に素朴実在論者に留まっているのではないかと思う。「主観／客観」の「一致」と「的中」という「真理観」を克服できていないのであろう、とも自ら思う。そして、実を言うと、僕自身が完全に克服した状態になりたいとは、どうも僕は思っていないらしい、という感覚がある。恐らく、それは、「確信の成立条件」の「確信」には、「主観／客観」図式における〈一致〉と〈的中〉の「確信」が、その中心に在って、他者の確信との「一致」と「共有」の確信だけでは、僕自身は「真理」を「確信」出来ない、という思いが強固に在るからなのではないか、と思う。(4) 結局、僕は、こんな風に考えているようだ。超越における「真理」は、確かに、容易には、また、一遍には、到達できないということには同意できる。しかし、そんなことは、弁証法的唯物論でも、言っていることだ。そこで、現象学が、「主観／客観」の「一致」とか「的中」が不可能だというときには、ただ単に、それが容易ではないと言っているのではなくて、それは、原理的に不可能だ、と言っているのだ、と理解する。しかし、弁証法的唯物論では、有名な「相対的真理から絶対的真理へ」の指摘があって、それは、その時その時で、相対的には可能であり、しかも、その相対性は変化して行く、としているのだと、僕には思える。日比谷高校の一年生時代からの親友で天文学者の上条文夫君が、こんなことを話してくれたことがある。天文学者の間では、宇宙船の月面着陸が成功した時点から、現代天文学の宇宙理解への確信度が根本的に変化した、ということだ。つまり、月面着陸以前の天文学は、すべて地球上からの観測データ——用いられた望遠鏡の優劣はあるにせよ——に基づくもので

あった。だから、地球周辺の外部に出た場合に、その時の天文学が宇宙の現実に妥当か否かは、ギリギリのところでは、確信できなかった。しかし、月面着陸の成功によって、その実現に貢献したあらゆる諸科学、天文学、物理学、・・・の認識が「正しい」ことの自信を一層深めた、ということだった。より正確に言えば、少なくとも地球と月の間の宇宙空間周辺の範囲では、「主観／客観」の「一致」と「的中」への、天文学者の範囲での「確信度」が、深まった、という事だと思う。僕自身は、物理学や天文学では、その宇宙物理学の発見した「法則性」は自動的に宇宙全体に妥当すると考えられているものだと、思っていたので、上条君のこの話は、僕の人間学的な「真理」観とも整合的であり、納得するとともに、科学の最先端では、「真理」の主張は、その時点で獲得可能な実験あるいは観測データによって、変化すると考えられていることに、感銘を受けるとともに、納得もしたのであった。

哲学的な議論で、断定的に、「超越」においては、「主観／客観」の「一致」や「的中」は、確認できないことを根拠に、「内在」における「確信」と「確信成立」と「確信成立の条件」に「真理」の議論を限定するのは、どうも、性急すぎるように、僕には思われてならない。それは、科学や日常生活における「一致」としての「正しさ」や「本当のこと」についての確信の、具体的な在り様を具体的には取り上げずに、議論しているからではないか、と思われてならない。斎藤喜博の次の短歌が思い出される。

具體につけ具體につけと念じ來て

やうやくに私に一つの確信 喜博

斎藤が、一つの確信に到達する過程について、詳細に考えたことがあった。(註 3)

そういう意味で、哲学としての現象学が、より具体的な事例に即した「事例の科学」となるとき、現象学も「内在／超越」と「主観／客観」の架橋が成立し、観念論と実在論との統合が可能になるのではないか、と思われてならない。それは、自然科学と人間科学の差異と同一が視野に納められて、現象学に基づく統合的な学問としての「絶対的学問」に近づいて行くことを意味するのではないか、と思う。唯物論では、認識における「実践」を強調する。し

かし、そこで考えられている「実践」は極めて卑近な説明のための事例にしか過ぎないことが、僕が知る限りでは、多かつた、と思う。逆に、現象学では、「事例の科学」として、日常的な「実践」の事例に即した解明が、人間科学において生まれてきている、例えば、Max van Manenの挙げる「触診」の現象学的な事例研究がある。そして、それは、实在論でも観念論でも、妥当だと受容できる事例と解明になりうるのではないか、そんなことを、思う。

「不可疑性」の「確信」に対する疑い深さは、僕の場合、戦前・戦中の日本と戦後の日本との間で起こった様々な「確信」の崩壊と再構築の個人的な経験の積み重ねから生じた根深い感覚によるのではないか、と今の僕は思う。そして、僕は、僕なりに、その「疑い深さ」に納得している。「疑い深さ」を「疑って」みても、「確信」には、届かないのではないだろうか。

また、こんなことも考える。現象学の始祖フッサールにしても、「ブリタニカ草稿」の執筆に当たりハイデガーを共同執筆者として選んだ時点では、恐らく、その共同執筆が順調に進むことを予期して居たに違いない、と想像する。その上で、その計画がさまざまな経緯を経て破綻する。また、ナチス体制下で、ハイデガーによる彼フッサールの研究活動への妨害を、彼自身は予期しておらず、それ以前には、ハイデガーを信頼していた時期が在ったに相違ない、とも想像する。そして、その信頼が崩壊する。さらに、没後の葬儀に際してのフッサール家とハイデガーとの不幸な出来事の挿話、などなどを知ると、現象学の始祖においてさえ、他者であるハイデガーへの「信」が裏切られることを予期できず、そして、それを防止することが出来なかったもの、と想像される。つまり、フッサールの現象学研究における「可疑性」と「不可疑性」に関する深い思索も、実生活においては、ハイデガーの師フッサールへの裏切りを予期できず、また、防ぐことも出来なかったもの、と想像される。この想像に特に無理があるとは、僕は思わない。

また、例えば、インガルデンが提起したフッサールの「超越論的現象学」への疑問に、フッサールは深い関心を示していたという挿話を読むと、フッサール自身、その現象学研究において、他者であるインガルデンの異論と批判を受け入れる心の用意が

あったことが推測できる、と考える。で、僕の思うことは、こうだ。フッサールの所論は、時間を掛けて生成されて行ったのであり、その限りで、常に、変更の余地が残されていたこと、しかし、元数学者だった哲学者らしく、厳密に、慎重で深く思慮深い思索により、その哲学が紡ぎ出されて行ったに違いない、ということ信じることが、僕にもできる。フッサールは、常に、絶えず前進し続けて行った学者だったのだ。しかし、全知全能の神ならぬ一人の人間である以上、誤りを犯すこともあったであろう。そして、実生活においては、たしかに、誤りを犯した。子ども時代のことを見ても、フッサールが「誤りを犯したことがない」ということは、あり得ないであろう。とすると、かれの現象学が「確信成立の条件」を明らかにするところまでであって、素朴实在論者である一般人、あるいは、自然科学者たちの求める〈主観／客観〉の〈一致〉としての「真理」あるいは「本当のこと」を明らかにすることはめざしていない、という彼の現象学を、さまざまに誤解する人々が現れることは、少なくとも、やむを得ないことであり、さらに、当然でさえもある、と僕は感じてしまうのだ。このことは、現象学についての23の定義の多様性の出現にも見てとることができる、と僕は思っている。

仮に、現象学が「確信成立の条件」を明らかにするに留まるとする。すると、そこで得られる智慧は、恐らく、僕が若い時に研究した「説得」の心理学に繋がって行く可能性が在るだろうということが見えて来る。その詳細は、Carl I. Hovland等の数々の心理学的実験研究^(註4)に見ることができる。それが、戦時中の宣伝戦や、戦後の広告企業の理論的支柱となったことを、想起する。だがしかし、今の僕は、現象学をその範囲に留めることでは、全く満足できない。現象学は、むしろ、「想像の現象学」として、可能な限り、徹底的に、自ら考え抜くことを求めているのだ、と僕は信じた。その上で、仮に「誤り」の可能性が予期されても、敢えて、自らの責任において、自らの生きる在り方と進むべき道を自らで決定し決断する。そして、その結果から学び、覚悟する。その悟りを、つぎの決定と決断に活かして行く。……。そんな風に、僕は感じている。

例えば、西尾幹二著(2020)『歴史の真贋』新潮社、を読む。そして「真贋」について考える。そし

て、戦前と戦後の、内外の、多種多様な情報の「真贋」を考えてみる。戦前の日本が置かれていた厳しい状況と、当時の米大統領ルーズベルトの置かれていた状況を考える。トルーマンの、広島と長崎への、原爆投下の決定と、戦後のGHQによる「焚書」の意味を思った。また、戦後の教育改革が、戦前の日本の教育実践の真剣さと、戦後、教育水準を低下させたこと、僕の眼に映るそれらのことの意味を、改めて考えさせられた。西尾幹二著『国民の歴史』の一部も読んだ。同世代であるためか、共感できる場所が多かった。「学ぶ」と「理解する」、そして、「驚き」を、具体的に考えることを求めて読んだ。そして、とても刺激を受けた。「食わず嫌い」で読む機会を失する愚を避け得たことを、僕は誇りに思っている。

さて、現時点における、僕の考えはこうだ。O.F.ボルノー著（1978）『真理の二重の顔』（西村皓・森田孝訳、理想社）という本がある。僕は、この本を1978年に読んで居る。今読み直す時間は無い。ただ、出来たら、死ぬ前にもう一度読み直してみたい、とは思う。ボルノーは、「真理概念の二つの構造様式」を紹介している。その紹介に依れば、ギリシャの伝統における〈鏡〉としての真理概念、それは、「与えられた事実についての正しい言表である」とされる。これに対して、ヘブライの伝統における〈巖〉としての真理概念、それは、「ある物またはある人間の、そして、当然また神の信頼性を表わす。それは、『人がそのゆるがぬ持続を信じているとこと一切のものに認められる……。持続的なものの上にこそ人は構築しうる』」、そして「この象徴が支えとなる巖である」とある。〈鏡〉と〈巖〉としての「真理」、その二つそれぞれの象徴のイメージの対比は素晴らしいと思う。

こんなことも考える。科学的実験心理学者は「鏡」を、臨床的心理学者は「巖」を、「真理」として捉え、求めているのではないか。端的に言って、〈鏡〉には「知る」が、〈巖〉には「生きる」が対応する。〈鏡〉は、書齋で思索する現象学者の真理観を、〈巖〉は、物事と他者と組み合って闘う実践者の真理観を、僕は思う。また、評論家と実作者、運動コーチと運動選手、理論家と実践者、……。

人間は、それぞれに〈知ること〉を重ね、〈誤り〉

を犯し、〈生きる〉ことを重ねていくのだ。

斎藤喜博の短歌世界に見る「言うこと」と「行うこと」

僕は、1971年から1981年までの十年間、教育実践者・斎藤喜博・師に、直接、授業と教育実践について懇切丁寧な教えを受けた。斎藤喜博は、僕にとって、「短歌」の師匠ではないが、「教育実践」の師匠であり、恩人でもある。その斎藤喜博の短歌の世界に入り、「言うこと」と「行うこと」を見た。師は、教育実践を〈知る〉だけでなく、〈生きる〉人であった。知りつつ生き、生きつつ知る人であった。ここに選んだのは、『斎藤喜博全集 15-2』国土社に収録の歌集、「羊歯」、「證」、「職場」、「『職場』以後」からである。煩瑣を避け、選んだ短歌を年代順に並べる、短歌のみを記す。歌集をよまずして、斎藤喜博を知ったとするのは貧しく知る人だ。そう僕は思う。選んだ短歌は数が多すぎた。で、現象学の定義23に合わせて、恣意的に、二十三首に絞った。選びながら、いろいろ想像を促され、楽しかった。それぞれに、深い思いが込められている。

僅かばかりの金に苦しむ父母は
 嘆き気弱く吾は育ちき
 ずるきやつ無気力なやつ無知なやつ
 皆のっぺらとしてよく口をきく
 自分自身の聲に従つてのみ仕事して
 来しことだけをなぐさみとする
 電話にて指示し来りて何もかも
 証據残さぬことも憎しむ
 表現したものは消すことが出来ない故自分の證だ
 と思ふ
 俺のことは俺が一番知ってゐる
 批評は君らにもゆるさされている
 仕事すれば住みづらくなるは必定ぞ
 すでにきざしの幾つかは見ゆ
 傍観者だけが不平を言ひ文句をいふ
 こともはつきり今日は知りたり
 學問のなきことを卑下することなかれ
 君には君の実践がある
 生まれ出し喜びは月見草にもあるものを
 さかしらな人間どもは忘れゐる

力もないくせに何でも引き受けて阿呆な喜博がよ
ろめきている
大學教授の君らより実践の場を知れば君らより実
践者をわれは尊ぶ

おとなしくして居ればなほつぶされる
理^{ことわり}が君には未だわからぬ

少数をわれは信ずるきびしくて
孤獨な少数をわれは信ずる
未来そのものが今日の前にあるのだと
この子らをみていふ人のあり
さまざまのデマも誹謗も嫉妬より
起り事實はそれを越えてゆく
自分をみつめる以外に実践などなきことを知らぬ
奴が何をいふ
事實だけが尊いことも豊かなるものを持つことも
いよいよ知りぬ
具體につけ具體につけと念じ來て
やうやくに私に一つの確信
実践者の思想は行動にあるのだと言ふのも実践よ
りの一つの確信

言葉だけで生意気云ひるお前らよ
ここに生まれ來しものをよく見よ
理論などつくらずともい今はただ
小さき事實を積み上げるのみ
事實だけをわれは信ずる人の心
かへる事實をわれは信ずる

以上 二十三首

さて、現象学に、僕が求めていたことは。現象学が「事例の科学」であるという言葉とその実現の可能性を信じ、教育実践における具体的事例の解明を通して、人間の生存全体の意味と調和する、一人ひとりの生存の意味の発見と実現への道の解明であり、そのような意味の生成の過程の創造であり、そのような意味の生成を促す教育実践の実現の道であった、と今にして思う。例えば、僕の専攻した認知心理学的な教育心理学は、いま思えば、事実学であることを目指す技術学であった。それは、「人間の生存全体の意味」と「人間ひとりひとりの生存の意味」を考えようとするなど、思いも及ばない、

専ら「科学」であることを目指す心理学の一翼として、専ら〈教育〉を研究する「専門分野」に過ぎなかった。そして、僕自身も、現象学に近づく以前は、科学であることに誇りを持ち、そうした「哲学的な問題」は、教育哲学の専門家に任せ、教育の心理の研究者でありながら、専ら事実学と技術学の限界内に留まろうと努めていた、と想起する。いま思えば、それが、同じ神谷美恵子の著作『生きがいについて』には心打たれながら、フロイト、エリクソン、ピアジェの心理学を発達段階に沿って紹介し、人間の一生の「こころの旅」を描いている著作『こころの旅』には、特に惹かれることがなかった理由だと、納得する。僕は、教育により育てられる「人間ひとりひとりの生の意味」の理解を探し求めていたのだとも思う。それを、科学としての事実学である心理学に求めるのは、見当違いも甚だしかつたに相違ない。では、教育の研究としての教育心理学が、そのような探究の欠落したままの事実学としての研究に留まるとするなら、それぞれの個人の一生を視野に入れ、その幸せを願い、その願いの実現をもたらす社会の構築と実現に参画する学問と成る道はあまりにも遠い。その願いは虚しい夢に終わるであろう。

そうした問題が、科学的な教育心理学の充実を目指していたはずの僕が、齋藤喜博の教育実践に衝撃を受け、その実践研究に参加することにより、認知心理学の世界から現象学の世界への世界間移行を、僕にとって、必然的にしたことの根底に在ったことに、気づく。

〈二刀流〉の勤め

心理学研究にせよ、教育学研究にせよ、若い研究者は、早くから、〈二刀流〉の使い手となるべきだ、と僕は思うようになった。〈二刀流〉とは、ここでは、その学問領域で、相互に異なる——出来る限り極端に異なる——二つの〈流派〉それぞれの熟達した使い手と成ることを意味する。野球の大谷翔平の、投手と打者の二刀流を思えばよい。その例を挙げるなら、〈実践者と研究者〉、〈行動科学と認知科学〉あるいは〈行動科学と精神科学〉、〈観念論と実在論〉、などが考えられる。現象学を二刀の一方とする対に、僕は、〈現象学と弁証法的唯物論〉を望む。そのほか、〈現象学と分析哲学〉、〈現象学と

数学)、〈現象学と医学〉、〈現象学と芸術学〉、〈現象学と演劇学〉、〈現象学と武術〉、・・・、などなどが考えられる。可能性を列挙すれば、限りも無い。

ここで、〈二刀流〉は、対の大刀と小刀(脇差)は、当初は、その個人において先に専攻されたのが大刀、後に専攻されたのが小刀(脇差)と考えることになるだろう。もちろん、特定個人における大刀と小刀の関係は、時とともに、変化する場合も考えられるであろうし、その両者がどのように使われるかも、多種多様で在りうるだろう。

仮に、多くの人々が〈二刀流〉の使い手、しかもその名手、となる事態と状況とが生まれたとしよう。すると、それは、複眼の名手が多く遍在する状況が生まれたことになる。それは、個人において複眼が成立することを意味するだけではなく、例えば、現象学の世界で、現象学を見る眼が多種多様化することを意味する。それとともに、現象学そのものも、その多様化によって、豊饒化することを意味するであろう。たしかに、現象学研究者が現象学のみ専門家であることを妨げる理由は無い。また、現象学は、既にして、十分に多種多様である。しかし、例えば、友人のDavid Seamon教授によれば、建築学の領域における現象学的研究は、多くの建築家、設計家の現象学的研究として、現在、深化発展している、ということだ。それは、多くの建築家たちが、自ら現象学を学び始めて、それを建築学における現象学的研究へと発展させるだけの知力と才能に恵まれていたことから可能になったもの、と僕は考える。では、〈教育と授業〉の実践と研究に関してはどうか、あるいは、〈看護実践と看護研究〉についてはどうか。僕の知る限り、この二つとも、これからの新たな発展が大いに期待される。その手始めが、〈二刀流〉の使い手の「共育」だ。これが、〈二刀流〉の勧めだ。僕としては、特に、優れた教育実践に即しての、実践と現象学研究の二刀流の達人の出現とその成長と成熟を、教育の〈実践と研究〉双方の深化と充実と発展のために祈りたい。

「嘘」の人間的意味の現象学的解明を願う

人間は、嘘をつく生き物である。人が、「嘘をついたことが無い」と言ったとすると、その言葉の意味の理解については、慎重を要する。そもそも「嘘」

をついたことが無い人に、「嘘とは何か」、「嘘をつくとはどういうことか」が、どのように理解されているかを明らかにすることは、非常に難しい問題なのである。例えば、J.Piagetの古い臨床的研究にあったように、「嘘」という言葉の理解そのものが、子どもの発達とともに変化して行くと考えられる。さらに「嘘」が、何故「いけない」とされるのか、その理由の理解もまた、変化すると考えられる。さらに、他者の「嘘」によって「騙される」経験の有無が、「嘘」の理解を変化させるであろう。さらに、「嘘についてはいけません」と言う大人が「嘘をつく」のを見る経験も、子どもの発達にとっては、大きな出来事と成る場合もあるだろう。

大人の社会では、子どもの眼で見れば「嘘」と見なされうるような「嘘」は、日常的に横行しているに違いない。それでいて、例えば、小学校では、「嘘をつくな」の教育は、かなり厳しく、行われている可能性が高い、と僕は思う。もちろん、それゆえ、子どもは、「嘘はついていない」という嘘をつくようになる可能性も生まれて来る。

ところで、社会によっては、子どもの嘘の有無が、人々の生死と運命とを左右する場合があることを忘れてはならない。例えば、ナチスドイツでは、ナチス体制に対する反逆の可能性の有無を調べるために、学校の子どもたちに家庭内の会話内容を語らせて、それを探ったと、読んだことがある。この場合、子どもが正直であればある程、その家庭には危険が迫る可能性が生じることになる。で、もちろん、大人たちは、子どもの前では、子どもに家庭外で話されて困るような会話は避けた、と伝えられている。そんなことは、日本でもあった。例えば、戦争末期には、「この戦争は負けるかも知れない」という会話は、「家でこんなことを話していたことを、外では、しゃべってはいけませんぞ」と念を押して注意された経験を、ある人が、実話として、語ってくれたことがある。そうした秘密を要する社会では、「嘘のつけない」子どもは、扱いの難しい危険な存在となる。今日の独裁国家でも、おそらく、そのような事情は現実的であるだろう、と思う。

「お前は嘘つきだ」という決め付けた非難を公けの場で投げつけることは、喧嘩を売る場合によく使われる常套手段だ。西部劇映画でよく見るシーンに、強い悪い奴が弱そうな善人に、人前で、「嘘つ

き」との売り言葉を投げつけて、善人も、傍観者たちに「男らしさ」を見せるために、それに応えると、「外に出る」ということになり、拳銃による決闘となれば、銃の下手な善人は、早打ちの拳銃使いの手で、あえなく命を落とす、というような筋書きは、しばしば見かけるところだ。もちろん、現代社会でも、似たような事件がある。貧乏人を潰すには、「お前は嘘つきだ」と喧嘩に誘って、名誉棄損での裁判に誘う方法がある。民事裁判となれば、経済力のある喧嘩の売り手が、高額な敏腕弁護士を雇い、名誉を棄損された貧乏人の方が潰される可能性が出てくる。僕自身、その手を使われて、一生に一度のことだったが、公の場で「嘘つき」呼ばわりされたことがある。僕を心配してくださる方々に大きな迷惑を掛けることを回避して、最初で最後の「嘘つき」の汚名を、取立てそそがずに、僕は事件となることを避けてやり過ごした。出版社の編集者と呼ばれる仕事の人に、僕が寄せていた盲目的で世間知らずの「無条件の信頼感」の喪失へと導いた出来事だった。まさに、「人間ひとりひとり」である。その後、それっきり、その編集者とは縁が切れた。社会は複雑な歴史を持つ。その事件には、「江戸長崎」風の怨恨が絡んでいたことを知った時には、本当に驚いた。僕自身、後輩に、同じような思いをさせてはならない、と思うと、よい経験となった。あれが、江戸時代の武士社会だったり、西部開拓時代のガンマン社会だったりしたら、恐らく、僕もやり過ごす訳にもいかず、追い詰められて、殺されていたかも知れない。「嘘つき」という売り言葉は、僕にとり、下手をすれば、命を落とす事件に繋がりがねない恐ろしい言葉となった。宮澤賢治による忠告が、僕において生きたのだった。

現在、僕の住んでいる県では、高齢者に、いわゆる「おれおれ詐欺」の被害者が多いらしい。事件を知るたびに、僕は思う。「いい人たちなんだなあ。なのに、ほんとに気の毒に」と。悪い人は、善い人のことが良く分かる。わからなければ、悪いことが上手くいれないからだ。ところが、善い人は悪い人のことが分からない。世の中に、そんな悪いことを考える人が居るということさえ、思いが及ばない。そういう組み合わせで、「おれおれ詐欺」は、まんまと上手くいくのだ。「人を見たら泥棒と思え」とは、子どもの頃、聞いたことのある言葉だ。被害に

あっている人々は、あの言葉も忘れてしまった幸せな高齢者たちなのだろう。さて、広義の現象学あるいは人間科学は、この事態と情況に、何らかの、社会的貢献はできないものだろうか。「嘘の現象学」と「嘘の教育学」の可能性は如何？ いや、事例と事柄の詳細を調べるとともに、何らかの対策を示唆し、具体的に提言して、社会に貢献ができる筈の場が、現象学に与えられているのではないか、僕はそう思う。

「嘘の心理学」と題して、10回ほどのセミナーを社会人向けに開いたことがある。人気があった。そのことを思い出した。「おれおれ詐欺」の実情と実態を調べて詳細に解明し、潜在的被害者に有効な忠告を、また、一般社会に有効な対策の提案を、発することは、現象学の能力を超える事柄だろうか。

それは、現象学の普及にも役立つだろう。もちろん、「おれおれ詐欺」の詐欺師たちも、狡猾な手段の研究を更に深めて来るだろう。現象学研究者も一度の研究で済ませるわけには行かない。それが、現実の人間世界というものだ。結論的な研究書は、直ぐに、古くなる。詐欺師も、さらに狡猾になって来るからだ。この関係は、教育実践と教育研究の「二台のクレーン」と類似する。『法華経』、シェークスピア、犯罪小説、犯罪記録、収監中の詐欺師との面談、諸国の歴史からの学び、ナチスのゲッペルスの記録、戦争中の作戦における「嘘」の知恵、日本のみでなく、諸外国の、「嘘」を巡る物語に秘められた智慧、などなど、智慧の発見への手掛かりは、無数に在る。現象学研究者の出番だと思うのだが、さあ、どうだる？

終わりに

短く書くつもりだったのが、時間一杯に書くことになり、この長さになってしまった。僕としては、後悔はない。編集部で許容されるか否か。

「或る老いた教育心理学者の独り言」、どこかで何かをお聞きとりくださって、どこかを、実践なり研究なりに、活かしていただけたら、あの世に近い僕としては、それ以上の喜びはない。お読みくださった方に、お礼を申し上げます。有難う御座いました。

註

- (註 1) 数多くの引っ越し(転居)、数多い所属学校の移行(国民学校五校間の転校、中学二校間の転校)、運命的に遭遇した大きな社会変動(平時から戦時、そして、1945年の敗戦、大日本帝国から日本国への「180度の転換」)、進学浪人、東京大学での専攻学問間の移行(理科一類から文科二類へ、数学志望から未知の學・教育心理學の世界へ)、心理学内部での学派間の激しい移行(数量化心理学、弁証法的唯物論心理学、認知心理学、そして現象学的心理学へ)、イリノイ大学大学院でPh.D.取得に到る経験(当時出会った恩師、諸外国からの友人たち、ホストファミリーとの出会いと長年の交流など)。諸大学間の移行(東京大、イリノイ、コーネル、お茶大、東大、デューク大、岩手大、川村学園女子大、淑徳学園大)、非常勤で勤務した多くの諸大学間の移行体験(都留文科大、中央大、埼玉大、お茶大、日本女子大、立教大、放送大、九州大、岡山大、京都大、大阪大、群馬大、岩手大、大正大)、「教授学研究の会」の十年間の活動経験、多様な社会的諸活動の経験。諸外国遍歴訪問の経験、諸学会の間の移行体験、出版社を含む関連する他業種の人々との交流、生家に入出入りした多くの人々との関わり、・・・など。
- (註 2) スティーン・ホーリング著(2020)「現象学の本質。〈許し〉との関連」、吉田章宏訳、『事実と創造』12月号、一莖書房、2-16
- (註 3) 吉田章宏著(1999)『ゆりかごに学ぶ：教育の方法』一莖書房、23-37
- (註 4) C.I.Hovland & others (1953) *Communication and Persuasion: Psychological Studies of Opinion Change* Yale Univeristy Press.